

ジャグパル

JugPal



2003年10月1日 第21号



インタビュー

【クラウンYAMAさん】

クラウンYAMAさん(以下YAMAちゃん)にお会いしたのは、彼が国立モスクワサーカス学校から帰ってきた時だから4年ほど前ですかね、初対面でも彼の人なつこい丸いお顔の笑顔がいっぺんで気に入りました。

今回はそんなYAMAちゃんと、彼をしっかりとサポートしている由衣さん(奥様)にお会いしました。彼を語るキーワードは、『純』。そんな思いをしたインタビューでした。



クラウンYAMAさんと 由衣さん

クラウンを目指して

YAMAちゃんは、実はお笑い芸人を目指していたのですが、たまたま入った「サーカスレストラン(カーニバルプラザ市川スタジアム)」でアルバイトをしていた時に、出演者のクラウンたちに興味を持つようになり、シルク・ド・ソレイユの「ファシナシオン」を観て、クラウンになりたい!と思うようになったそうです。(ファシナシオンの来日公演は確か1992年)

そのレストランには世界各国からクラウンが招聘され、YAMAちゃんはその中でもロシアのクラウンに魅せられました。

彼らはアメリカのクラウンのように派手さはなく、むしろ地味ですが人間味溢れるその演技の方がYAMAちゃんには性格的に合っていたようです。

その頃からロシアに行って学びたいという願望が強くなってきました。

そこでレストランのサーカスプロデューサーにお願いして、国立モスクワサーカス学校に入ることとなり、YAMAちゃんのクラウンを目指した活動がスタートしたのです。

サーカス学校に入学して

1998年から1999年までの約1年間留学。

学校は生徒数が約200人ほどで、学校自体は古い建物ですが、中に入るとサーカスリンクはもとより、トレーニング場、バレエ教室など様々なスペースがあり、最新設備は無いにしろ内容は充実していたようです。

そうそうここではYAMAちゃんの前には、クラウンのPONTAさん(ジャグパル12号参照)が学んでいたとのこと。

授業はアクロバット、ジャグリング、クラウニング、バレエ、タップ、ロシア語と盛りだくさんで、日本にいた時はジャグリングをレストランのクラウンに習っていた程度だったので、ほとんどを基礎からやらなければならず大変でした。

月謝はロシア人は無料で、留学生は月350ドル程度で、入学前に日本で貯めていたお金をこの費用に充てていました。

なおここでの留学記は、YAMAちゃんのWebサイトに詳しく載っているので併せてお読みください。

戸惑ったこと ~ その1 ~

先生にテーマを与えられ、「これは日本人だったらどう表現するんだ？」と日本の芸人としての応え(振る舞い)を要求されましたが、今まで日本人ということを意識したことが無かったので、本当に困ったそうです。

そんなこともあり、帰国後、日本の伝統芸へも強く関心を抱くようになり、江戸太神楽十三代家元鏡味小仙に師事するようになりました。

今では曲(曲芸)はもとより獅子舞までこなしています。

戸惑ったこと ~ その2 ~

在学中には、帰国後にはクラウンとして活動することを考えると、30分のショーを構成するには様々なことを習得しなければならないと思い、例えばジャグリングだったら3つ以上の4つ、5つと数を増やしたいと先生にお願いしても、「なぜ数を増やす必要があるのか。今できることで最大限面白く見せるにはどうしたらよいかを考えてみなさい。」と取り合ってもらえずにこれまた頭を抱えました。

エピソード

平日は9:00~18:00まで過酷な練習が続き、皆に追いつきたい、少しでも多くを身に付けたいと、アパートに帰ってからも一人でトレーニングをしていました。

言葉の壁、なかなか馴染めない自炊生活、最低外気温が-40にもなる環境……なんと2ヶ月で10kgも痩せてしまい、先生も心配したそうですが、でも安心してください。帰国してから2ヶ月で15kg太ったとのことです。(リバウンド!?)

また学校生活では、特に積極的に生徒たちに話しかける訳ではなかったのですが、あまり語学は上達しなかったそうですが、先生からの推薦で特別に卒業公演に出演したところ、五段階評価で最高得点ももらい、それがきっかけで大人気となり、皆から話しかけられ、コンビを組まないかと誘われもしたそうです。

帰国して

学校に行く前と行った後では、自分自身何が変わったのだろうか、自問してみると、例えばボールジャグリングにしても3つからは増えていないし、何も変わっていないように思えてしまうことがあるそうです。

でも私が思うには、そんな目先のことよりも「ボールジャグリングはボールが美しいのではなく、人の動きが美しいのだ」と先生が教えて下さったそうですが、そういった美しさをYAMAちゃんは手に入れたのだと思います。

そうそう「間」の重要性もとことん先生に仕込まれたそうで、そういった「間」を生かしたYAMAちゃん独特の持ち味も成果のひとつではないのでしょうか。

それでもYAMAちゃんは不安で、7ボールを自在に操るジャグラーを見ると、凄いなぁと感心して、そういった一流のパフォーマンスを見ると自分の居場所が無いように思えてしまうことがあるそうです。

でもYAMAちゃんはまだ自分の凄いところに自分自身が気づいていないと思います。先生の言葉を思い出して、今持っているもの、それは技術ということもそうだけれども自分自身というものを核として、もっともっと成長していつてほしいものです。

YAMAちゃんはノンビリしたところがあるようですが、でもしっかりと自分の足下を見つめつつ、まわりからいろいろなことを素直に受け入れ、芸に憧れ、芸を畏れ、芸に惚れ込んで、いつも芸のことを考えている『純』なクラウンです。

そんな彼を優しく、時には叱咤して応援しているのが奥様の由衣さんです。今回のインタビューでも、私がちょっと意地悪なことを言うと、すかさず由衣さんがカバーに入るといふ、とても仲の良いお二人でした。

……最後に、そんな由衣さんからの「うちの旦那さんへの一言」を紹介しましょう。
“もっと積極的(社交的)になってくれるとありがたいです。”

お二人のWebサイト

・クラウンYAMAのWebサイト

<http://balloon-circus.com/yama/>

・由衣さん(奥様)の経営するバルーンショップのWebサイト

<http://balloon-circus.com/>

[安部 保範 <chansuke@chansuke.net>]



サーカス書籍紹介

『サーカス・そこに生きる人々』(1995年・文遊社)の著者である森田裕子さんが、新しくサーカスの本を書きました。

書名は

『内側の時間 - 旅とサーカスとJ・L・G』

シルク・イシ

森田さんはフランス在住で、複数のサーカス・カンパニーとの巡業生活を体験していますが、今回の本ではとくに「シルク・イシ」の話が詳しく出てきます。

このサーカスのショーはたったひとりのアーティスト(J・L・G - ジョアン・ル・ギエルム)が4人の音楽家とともに演じるもので、ヌーヴォー・シルクというジャンルを超えて、サーカスの本質に鋭く迫った独特な創作といえるでしょう。また著者の森田さん自身、この10年、一貫して「サーカスとは何か?」と考え続けてきました。今回の本ではそのことがホイジンガの「遊び」論や、プランショの「共同体」論との比較の中で深く追求されています。

文化政策

フランスでは芸術活動を支援する「文化政策」のシステムが非常にしっかりと組まれています。それがどういう制度であり、その中でサーカスがどう位置づけられているか、また、サーカスの労働組合の話なども、この本では詳しく書かれています。

放浪民

一方、オフィシャルな分野に組み込まれない放浪民のサーカスのことも、とくにジプシーであるアレクサンドル・ロマネストの交流を通じて紹介されています。

ところで、この本はまだ出版されていません。現在の出版市場の中では、サーカスの本は「売れない」という理由から、原稿枚数や内容などを変えずには出版できないという状況が頻繁にあります。そこで「作品を尊重するために、既存の出版社からの発行は考えず、読者から直接、本の購買予約または本の制作費への援助という形でお金を募り、本を印刷するのに必要な予算が集まった時点ですぐに、そこでは利益を求めずに本を発行する」……そういう企画を著者の友人たちが立てました。この企画の名前は「ぺらだん」です。これは組織ではなく、「あるべき姿で本を誕生させる」という行動を指し示す名前だということです。そして、この行動を起こした人(制作費を出した人)が本を誕生させるので、本の発行元の名前も「ぺらだん」になります。

ご興味を持ち、さらに詳しくお知りになりたい方は、是非以下のサイトをご覧ください。

ぺらだん

<http://www.chansuke.net/peradan/>

[安部 保範 <chansuke@chansuke.net>]



ぺらだんのWebサイト



地獄の一夏

以前 JugPal 8 号にて「火の用心！」と題し、火を使ったジャグリングの注意点と火吹き危険について述べました。今回は、アメリカのプロの火吹き芸人であり、昨年夏の事故で重症の化学性肺炎にかかって生死の境をさまよったペレ(Pele)さんの手記を、本人の了解をいただいた上でご紹介いたします。

火吹きをやってみたいと考える人には熟慮と再考をうながす内容であり、すでに火吹きをしている人にとっても、見過ごしがちな化学性肺炎の危険な症状とその経過を当事者の立場で述べた貴重な体験談です。

本稿は、ポイやファイアーダンスの愛好家が集まるインターネット上のサイト Home of Poi (<http://www.homeofpoi.com/>) において、同好の士への報告と教訓として書かれたものです。それゆえ、火吹きや火を使う芸をする人を読者に想定していますが、その背後にある、筆者の安全への願いを読み取っていただければ幸いです。

地獄の一夏

ジュリエットが作ったこのすばらしいサイト(訳注1)に寄稿することを持ちかけた時、自分が何を書きたいののかははっきりした考えがあったわけじゃなかった。炎を愛する友人達に私が与えるべきものは何だろう？芸人として、そして人間として自分が学んだことを分かちあいたいのだとは分かっていたのだけれど。

するとジュリエットは、この2、3カ月間に私が一番多く受けた質問、そして私がきちんと答えてこなかった質問を改めて私に投げかけた。「いったい何が起きたの？」

だからそこから書き始めよう。単刀直入に何もかもさらけ出して、私の内面へあなた達を連れていこう。そして、あの運命の日に何が起きたか、最悪の事故が起きるとどんなにひどいことになるかを追体験してもらおう。私から呼吸を奪い、あやうく命までも奪うところだった、あの最悪の事故を。

その前に、私を知らない人たちのために少しか自己紹介をしておく。私の名はペレといい、アメリカ合衆国北東部を拠点にしているパフォーマーだ。Home of Poi の掲示板管理人をしているが、ときどき自分の意見を言い過ぎるきらいがあるし、安全についてすごく口やかましいことで知られている。私は、創作活動に力を注ぐ、根っからのプロフェッショナルだ。表現の媒体として用いる火が大好きだし、炎の美しさと華やかさを十二分に見せつつも、確かな技術で安全に、かつ安心して見てもらえるように努力している。そして、2002年7月20日、炎への愛のため私は死にかけた。

あなた方の多くが知っているように、アメリカでは、7月はパフォーマーにとって忙しい月だ。私にとって2002年の7月は今までで一番忙しかった。立て続けにショーの仕事があったし、ショーがないときには振り付け、リハーサル、打ち合わせや衣装デザインをしていた。おまけにその月は、近年まれに見る熱波と日照りに見舞われていたのだった。暑かっただけでなく、堅く乾いた地面のせいで本番直前にステージを作り直す羽目になったり、本番直前に場所替えがあったりで、夜も昼もないような状況だった。

特に7月19日はひどかった。当時の私の後見(安全確保係)であり、創作の相棒でもあったプロメテウスと私は、茶色の草に覆われ風が吹きささぶ荒れ地で、本番間際の調整をしていた。そこで4日間、30時間の公演をする契約になっていたのだ。説明の付かない不安感が私の心を満たしていた。

隠さずに言うけれども私は本番前にひどく緊張するたちだ。いつも出番の1時間前になると、緊張が始まる。身体が震え、時には泣いてしまうこともあり、胃がよじれるような気分でショーから逃げる手はないものかと考える。本番が始まってしまうと大丈夫なのだが。

しかしあの時は、いつもより何日も早く不安な気持ちにとりつかれた。それも、幾晩も眠れず、昼間の気分が台無しになるような強い不安に。どんなに忙しく働いても、この不安な気持ちを忘れることはできなかった。私の最初の過ちは、虫の知らせに耳を貸さなかったことだった。

7月20日水曜日午後3時、自分の出番が来たとき、いつもと違って私はげんなりした気分だった。摂氏38度になるうかという暑い日に、コルセットとハイヒールを身に着け、幾重にも重なるビクトリア朝時代風の女性下着を着込んでいたのだ。普段の私ならプロとして当然、時間厳守なのだが、あの日はプロメテウスにうるさく言われてやっと時間通りにステージに出ていったような有り様だった。陽射しは容赦なく照りつけ、ステージに日陰はなかった。

私は気乗りしないままステージの準備をし、長柄のたいまつに火を付け、これから数日間仕事を
する現場の様子をうかがった。周囲に居た人々といえば、このイベントに出店している露天商の売り子
達や裏方達、そしてピクニックテーブルでフライドポテトを食べている家族が1組だけだった。私のステ
ージを強い風が吹き抜け、背景幕を何度か吹き倒したので、何回も調整し直さねばならなかった。

するとそこへ、イベントの実行委員達の1人であるデイブがゴルフカートに乗ってやって来た。デイ
ブは、まず腕時計を見て、「どうですか？うまくいってますか？」と礼儀正しく尋ね、また時計を見ては
「もう始められますか？」と尋ねる、といった具合に遠回しに催促をしに来たのだった。彼がカートに乗
って去って行くときの最後の言葉は、「それではよろしく。安全に気を付けて。」だった。

風に吹き上げられた塵の向こうへデイブが消えていく時、自分が肩をすくめたのを覚えている。そし
て大きなため息をついて、ショーを始めることにしたのだが、これが2番目の間違いだった。プロデュ
サーへの立場を考えてプロとしての判断を曲げ、やめた方がいいと自分が思っていたことをやってし
まったのだ。

そして3番目の間違いがあった。この文章を書いていて初めて、3番目の間違いに気付いたのだ
が、これこそが最大の間違いだった。先に書いたとおり、私は安全については人一倍気を付けている
し、他人にもしつこいほど忠告している。もちろん、チェックリストに載っている安全備品はすべて揃っ
ていた。絶対に間違いない、実際のところ、やりたくないことを先延ばしする口実として、安全備品の
点検を10回もやったのだから。

ショーに使う道具類にはガタもなかったし、煤も掃除してあって、すぐ使えるようになっていた。救急
箱の中身はきちんと補充してあったし、消火布、地面を覆う毛布、消火器、脱水症状を防ぐための飲
み物多数、濡れタオル、蓋が閉まる燃料入れも揃っていた。ステージには人が立ち入らないようにし
てあったし、安全備品の使い方を熟知した後見もちゃんと居た。

「安全確保は万全」と私は思っていた。でも今考えると、安全のために一番大切なものを忘れてい
たのだ。自分が扱っている火への畏敬の念を私は失っており、それこそが安全のためにもっとも重要
だったのだ。

言い訳はいくらでもできる。暑さ、長時間の労働、漠然とした不安感...。でも、突き詰めて考えると、
今まで長い間ショーをやってきて事故がなかったのを当たり前のように思い、油断があったのだと思
う。火に対する畏敬の念を忘れるとともに、自分自身、そして自分の芸を大切にしている気持ちも失っ
ていたのだ。目に見える安全備品だけでは不十分であり、自分を本当に守ってくれるのは火を恐れ自
分を大切にしている心だった。しかし、あの時の私は、火の扱いに慣れ過ぎてしまい、鈍感になっていた。

火に対する畏敬の念の大切さは、どんなに強調しても、し過ぎることはできない。実際、自分の事
故の後で、私よりもっと経験を積んだプロでありながら同じような事故を起こした人たちに私は出会っ
た。安全対策について話し出せばきりが無いのだが、火に対する畏敬の念を持たなければ、いくら安
全対策を立てても無意味なのである。これこそが私の最大の過ちだったのだ。

あの日は風がとても強かった。ほとんど吹いていないかと思えば、秒速13メートルの突風が吹い
た。ひどく乾燥しているので埃や砂粒が身体に当たり目を刺した。ポイやスタッフ(棒)の練習をしてい
ても、重みのある道具なのに風に邪魔され、ひどくやりにくかった。

かなり長い時間、風向きや風の強弱の変化を観察したところ、あの日の風はほぼずっと東風だっ
た。プロメテウスと私はどうすべきかを話し合ったのだが、結局は10年間身体にたたき込まれてきた
「何があってもショーを続ける」というプロの矜持を優先させ、判断を誤ったのだった。私の本能は、「や
めて帰ろう！」と叫んでいたのに。

ここで誤解しないで欲しいのだが、風の中で火吹きをしたこと自体がまずかったとは、私は全然思っ
ていない。もちろん、それが危険であることはとてもよく知っている。でも、中程度の風の中で火吹きを
したことは数え切れないほどあるし、その時々判断は正しかったと思っている(だが、他人には決し
て勧めない)。私の本当の間違いは、火を恐れ自分を大切に思っていればショーを中止していたであ
ろう局面で、プロとしての矜持に惑わされて判断を誤ったことだった。

やがて風は弱まり、柔らかいそよ風程度にまで落ちた。長柄たいまつ炎から判断して、風はまだ
東から吹いていた。私は燃料(灯油)を口に含み、火を吹いた。ここから先の出来事については、事故
の後でいろいろな噂や憶測が飛び交ったようだ。燃料を飲んでしまったとか、炎を吸い込んでしまっ
たとか、私自身もいろいろな話を耳にしたが、正確な事実は次のようなものだった。

私は狙い通りに大きな火柱を吹き出した。そして、知っている人もいるように、大きな火柱を作るた
めには燃える炎に対してさらに燃料を吹き込み続けていく必要があるのだが、まさにその瞬間、風向
きが変わったのだった。私は燃料を吹き終え、数歩後退して口をぬぐい、鼻から息を吸い込むところだ
った。急に風が強くなっただけでなく、同時に西風が変わった。吹いたばかりの火柱が私の頭の上に
逆流してきた。

そして、まだ燃えていない霧状の燃料が、ちょうど息を吸い込んでいる私の顔に吹き戻され、鼻から肺へと入り込んでしまった。ショーの用意を始めてからここまでは15分ほどの話だが、事故そのものは1秒足らずの間に起き、私はすぐに自分がまずいことになったと悟った。

私は空気を求めてあえぎ、水筒と活性炭入りカプセル錠を持ってきてくれと、プロメテウスにどなった。鼻の奥が燃えるように痛んだ。あっと言う間に喉がカラカラに乾いた。胸に両手突きを撃ち込まれた人を映画で見て、その痛みを想像したことはあるだろうか？まさにそんな痛みが私の胸を襲った。殴られる衝撃の代わりに、焼け火箸を突き込まれたような激痛が走った。ステージの背景幕の後ろで私はしゃがみこみ、息もできないほど激しくせき込んだ。そして嘔吐が始まった。身体中が万力に締め付けられているように苦しく、衣装に付いているレース生地を私は引きちぎってしまった。このような事故が起きると頭では知っていたが、まさか本当に起こるとは思っていなかった。自分に何が起きたのか私には分かっていたが、かわいそうなプロメテウスは私の容体を調べながらほとんどパニック状態に陥っていた。

およそ3分後、私は救急車を呼んでもらうように頼み、事故の15分後には病院にかつぎ込まれた。酸素吸入を受け、さまざまな質問へ茶化し気味の答を返しながら、すぐに良くなって明日には仕事へ戻れるだろうと自分では思っていた。自分のせいで仕事に穴を空けることになるかもしれないなどは毛ほども考えなかった。

私たちは診断の助けになるように燃料の容器を持って救急車に乗り、医者は胸のレントゲンを撮って中毒センターに電話をかけた。でも、こんな時にどうすればいいのか私は何も知らず、それが最後の失敗につながった。燃料を吸い込んだ場合の手当についても知らなかったし、患者としての権利についても知らなかった。燃料を飲み込んだ場合は胃に活性炭を入れた後で吸い出すのだと知っていた(訳注2)が、肺に吸い込んだ場合の手当については全く知らなかった。

レントゲン写真ができて来ると、肺の中に燃料は溜まっておらず、傷も付いていないことが分かった。つまり、吸い込んだ燃料はごく微量でレントゲンには写らなかったのだ(訳注3)。本当なら、湿った酸素を吸入させ気管拡張剤と抗生物質を投与したうえで、必要なら胃洗浄もするのが正しい治療なのだが、私はそんなことは知らなかった。中毒センターの専門家は私を入院させるように緊急治療室の医者に助言したし、私は家に帰れるほど良い気分ではなかった。だが、私が帰りたくないと言っても、病院は私を帰らせたのだった。燃料を吸い込んだのだから、医者に大丈夫だと言われたって納得できなかったが、結局私は病院を出ていった。つまり正しい治療法や治療手順、そして患者の権利を知らなかったために、医者の言葉に従って帰ってしまったのだが、これは失敗だった。

通常の病院の手続きでは、患者を帰す時、警戒すべき症状の一覧を渡して、それらのどれかが発生したら病院へ戻るように指示する。私の一覧表には、発熱、喉の腫れや痛み、呼吸困難、嚥下障害、胸の痛み、吐き気などの症状がひどくなったら、病院へ戻るように書いてあった。夜中の1時まで、これらの症状のいくつかが軽く出始めた。朝の6時頃にはプロメテウスは、私を緊急治療室へ再び連れて行かざるをえなくなった。病院から戻って12時間も経っていないのに。

もう一度胸のレントゲン写真を撮ってみると、両肺にかなり深刻な問題が起きており、滲出液と痰が溜まっていた。私は入院し、酸素吸入と投薬を受けることになった。この時点から、私の記憶はぼんやりしていてほとんど覚えていない。

地元病院の呼吸器科医から、私の症状は彼の手には負えないし、病院の施設も整っていないので、私を転院させなければならないと告げられ、私はとても動揺した。他の病院へ移動する救急車の中で目がさめたのを覚えている。

薬のせいで朦朧とした意識の中、男が私の顔の上にかがみ込んでいるのが見え、口の中には何か詰め込まれていた(あとで呼吸用のチューブだと分かった)。でも、薬で頭がぼろっとした状態で寝かされ、男にのしかかれて喉に何かを突き込まれているなんて女にとっては緊急事態だ。私は男をぶん殴ろうと暴れた。

次に覚えているのは3週間後のことだ。目が醒めると、母が私の手を握っていた。たぶん3週間のうち、何度かは目を醒まして泣いたことがあったのだろうが、鎮静剤をたくさん投与されていたので記憶が残っていない。喉の呼吸用チューブは抜かれ、代わりに気管切開が施されていた。喉に開けた穴から湿った酸素を肺へ直接送り込み、痰などが固まってしまうのを防ぐとともに、看護師が肺の中へ管を入れて痰を吸い取れるようにするためだったのだが、その痛みときたら筆舌に尽くしがたいものがあった。40度から42度の発熱が続き、医者達はこの熱を下げようと毎日苦闘を続けていたし、いまだに原因不明の膵臓炎と導尿カテーテルからの尿路感染も併発していた。医者の話によれば私は二度ほど死にかけたそうだった。

気管に管が入っていたので声が出せず、話すこともできなかった。かろうじて手を動かすことはできたが、起きあがったり、歩いたりすることはまったくできなかった。飲んだり食べたりすることもできなかったし、泣く体力すらなかった。たくさんの管が身体につながっており、マンガに出てくる怪人タコゲルゲのような姿になっていた。

私は、身動きもとれず、いらいらし、怒り、傷ついていた。そして、いろいろな人が見舞いに来てくれるにも関わらず、とても孤独だった。精神的にも肉体的にも感情的にも、今までの人生で一番厳しい試練であったし、子を持つシングルマザーとしては、感情の面が最もきつかった。

その後2週間、私は自分が回復するのを待ち望みつつ、もどかしい思いに悩まされた。テレビをたくさん見たけれども、素晴らしい夏が私を置き去りにして刻一刻と通り過ぎていってしまうのを見るのは悲しかった。この2週間は、まるで永遠のように思えた。まず体力を取り戻し、歩き方を思い出さなければならなかった。使わずにいたため、筋肉が10キロ近く落ちていた。飲物や食べ物の呑み込み方も、教わり直さねばならなかった。喉にもものを通すにも細心の注意を払わなければならず、最初のうちはもの見事に失敗した。

そして呼吸が一番の問題で、今でもまだ本調子ではない。誰にも教わる必要がなかった、呼吸という自動的で自然な動作をあらためて練習するのは大変なことだった。夜に眠っていると、呼吸監視装置のサイレンが鳴り響いて目が醒め、飛んできた看護師に「息をして！深呼吸して！」と呼びかけられることもしょっちゅうあった。身体で覚えていたことを思い出すのは、最大の試練だった。

病院で働く人たちとも顔なじみになったが、彼らのほうは私のことをもっとずっとよく知っていたのだ。励まし、助け、居心地が良くなるように最善の努力をしてもらったとはいえ、何から何まで世話をしてもらわなければならなかったのは、恥ずかしく情けないことであった。

今でも、私の喉の前面には、幅15センチ、高さ4センチの横一文字に傷が残っている。この傷は、毎日見るたびに、火を畏れ敬うこと、自分の勤に従うこと、知識を得ること、自分のプライドのために判断を曲げないことの大切さを思い出させてくれる。私が完全に健康を取り戻すのは、まだ先の話だろう。私の左肺下部の10パーセントには一生消えない障害が残っている。身体を鍛え直して、体力や持久力も取り戻さなければならぬ。でも、日一日と、私は回復してきている。自分が事故にあったのを忘れて無理をしてしまうことも時々あるし、本調子でないのもどかしく感じることも時々ある。

かねがね私は、「事故というものはいつか起きるものだと考えて、対策を立てておくべきだ。」と言ってきた。私自身の事故は自分で思っていたよりも早く起きてしまったが、私はゆっくりとではあるが順調に回復しているし、もうあんなひどい目にあうことが決してないようにするつもりだ。

さてここまでは、誰か一人でも私の経験から学んでくれると良いと思って経験談を語ってきたが、私が大事だと考える教訓を最後にまとめておこう。

1. **自分の本能と勤に従うこと。** 私がそうしていれば、あんな事故はたぶん起きなかつただろう。
2. プロデューサーやマネージャー、イベントの実行委員は、私たちの芸についてよく知っているわけではない。彼らの目的はお金を稼ぐことで、それは私たちも同じである。**雇い主に対して安易な妥協をせず、自分の意見を通すこと。** 雇い主の立場を考えて無理をするのが良いプロである、というのは間違いだ。
3. **患者の権利について知り、保険に入っておくこと。** 入院生活の後には、保険会社との交渉がとても大変だった。自分の身に起きうるすべての怪我や事故、病気について、必要な治療方法を知っておきなさい。事故はいつか起きるものだという心構えを持つこと。あらゆる種類の火傷(体の外側)、燃料によるかぶれ、燃料を飲んでしまったことによる中毒、化学性肺炎、煙を吸い込んで起きる問題、喉や気管や肺の火傷について、必要な治療法を調べ、紙に書いて救急箱に入れておくように。
4. **畏敬の念を持つこと。** これについては、いくら言っても言い足りないほどだ。火への畏敬の念を持たなければ、いくら安全対策をしても何の意味もない。火を畏れ敬うとともに、自分と観客を大切に思い、安全に気を配りなさい。火に慣れ過ぎてしまい、火を軽く考えるようになってはいけぬ。自分は絶対に事故を起こさないなどと考えるはいけぬ。

これらは単に私の意見と提案にしか過ぎないけれど、次のショーをする前に私の書いたことについて考え、そしてその後のショーの前にもいつも思い出してくれるとうれしい。

この数カ月の間、「気の毒なペレ」と皆が言っているのを何度も聞いたけれども、どうか私を憐れまないでほしい。なぜなら私は多くの点で恵まれているからだ。私は生きているし、今回の事故で、生きていることのすばらしさを知った。今思えば、今回の事故を起こしたのが、私の大切な仲間であるあなた達の誰かではなく、この私であって良かった。私はあの経験からいろいろなものを得た。強くなったし、賢くなったし、自分の芸に対する気持ちと情熱を新たにした。もう怒ったりうるたえたりはしていないし、事故がなぜ起きたかもきちんと理解している。

短い間だったけれども、私の内面への旅につきあってくれてどうもありがとう。私と同じように火を使う芸を愛する人たちに対して、自分の事故の状況や、その時々感情について語ることができて、私自身もすっきりした気持ちになれた。私を書いた体験談があなたたちの心に残ってくればよいし、火を使う時やステージに立つ時に思い出して安全を再確認するきっかけになってくれればとてもうれしい。たぶん近いうちに私は、あなたたちのショーの観客席に座り、他の観客たちと一緒に拍手喝采していることだろう。そして、できることならば、単なるパフォーマー同士というつながりではなく、火と炎、芸と芸術を愛する者同士として、あなた達と同じ舞台上で火を吹けるようになりたい。その日まで私は、あなたたちの健康と安全、そして胸いっぱい深呼吸できる幸せを願うことにする。

灰の中より甦りし者、ペレより

著者について

ペレさんは、2003年9月末現在、ほぼ健康を取り戻し、パフォーマーとしての活動を再開しています。今回は、この貴重な体験談をなるべく多くの方に読んでいただきたいと思い、日本語への翻訳とジャグバルへの発表を了承していただきました。原文は、以下のページにあります。

http://www.homeofpoi.com/articles/firebreathing_accident.htm

また、ペレさんが属するパフォーマー・グループのページと、ペレさんのEメールアドレスは以下の通りです。

Pyromorph のページ <http://www.pyromorph.com/>

Eメールアドレス Pele@Pyromorph.com

訳注および訳者あとがき

訳注1: 本稿が最初に発表された、Home of Poi とは別のサイト

訳注2: 大量の燃料誤飲の場合、胃洗浄をすることがあるが、これは設備の整った病院で食道と喉にチューブを通して行わないと、燃料が気管に入り、より深刻な化学性肺炎を起こす危険がある。一般に、燃料を誤飲した場合、決して吐いたり吐かせたりしてはいけない。これは燃料による中毒よりも、燃料が気管に入って起きる化学性肺炎のほうがずっと危険なためである。

訳注3: 気管や肺に燃料が入った場合の致死量はわずか数ccと言われている。

今回の翻訳は、ジャグリングやそれに関係する分野での安全意識を向上させ、あまり知られていない化学性肺炎の危険を広く知らせるために行ったものです。訳者個人は、必要性もなく興味本位の人が、正しい訓練も受けずに火吹きを試みるようなことは絶対に避けていただきたいと考えます。その一方で、十分な訓練を受けた人が職業上の理由で火吹きを演じることには反対するものではありません。

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]



サーカス見物記

フランスは現在サーカスが非常に盛んで『パリスコープ』という雑誌(日本の“ぴあ”にあたる)には、週10本以上のサーカスが載っていたりすることもあります。

今も“ヌーヴォーシルク(新しいサーカス)”と呼ばれる芸術的で前衛的なサーカスが各地で次々と誕生しています。

そんなサーカス大国フランスに1ヶ月滞在して、いろいろなサーカスを見てきましたので、印象に残ったものをいくつか紹介します。

Romanes . Cirque tsigane (Le Mariage gitan)

と、書いたところで何のことかわからないと思うので、日本語に訳すと、ロマネサーカス(ジプシーのサーカス)の「ジプシーの結婚」という作品です。

ラヴィレットというヌーヴォーシルクの公演が頻繁に行われる公園内にテントを張っていて、フランスでも有名なヌーヴォーシルクだそうです。

ジプシーの結婚がテーマだけあって、最初にアーティスト(村人の格好をしているが盛大な感じで新郎新婦がステージに向かいます。

すると、何を思ったか新婦がいきなり縄(コードアヴィスという道具でキダムとかにも出てきます)をのぼり出してくると回されはじめます。続いて新郎が首に縄をつなぎくるくる回されます。背骨は折れないのでしょうか。

他の演目をあげると、ボールジャグリング、ダンス、サッカーボールジャグリング、エアリアルフープ、フラフープ、綱渡り、床を使ったバウンスジャグリング、デュオトラピーツ、その他山羊が出てきたり、補助演目にスウィングトーチでスネークをやる女性などがいました。

どの演目も素晴らしかったのですが、ジャグリングの部分だけを取り上げておきます。

最初のボールジャグリングは技よりも動きが面白かったです。

パントマイムのような動くにくねくねした動きを組み合わせた独特の3ボールは、さすがにヌーヴォーシルクだと思えるような新鮮なものでした。

頭と足にブレイクダウンしてからシャワーに移る技など技術もあり、実にブラボーなジャグリングでした。

また、サッカーボールジャグラーもなかなかです。ヘディングしたままの4ファウンテンや、ヘディング2 in 1 など。

その若干砂漠化が進行しつつある頭が練習の激しさを語っていました。

最後にボールスピニングでボールを縦に3つおせてしまう荒技には大盛り上がりでした。5回ほどミスしたのはドンマイとして、だんご3兄弟のようで見た目にも面白い技でした。

バウンスジャグリングは、最初に出てきたボールジャグラーでしたが、コメディタッチになっていて、空気がなごみます。

7ボールバウンスで最後何気なくかばんの中にバウンスさせて全回収するなど、やはりすごみを感じさせます。

全体の雰囲気としてはサーカスというよりもライブハウスにいる感じでしょうか。

ミュージシャンたちが、ショーの盛り上がりにあわせて手拍子や声で盛り上げるなど凄いエネルギーを感じます。

全てが終わって汗だくになっていたのは暑さのせいだけではない気がします。

最後に団長が「コカ・コーラとこの本をお買いあげ下さい。」と言って自分の偉人伝を45ユーロで売っていたのはなかなか楽しかったですが、誰一人として買っている人はいませんでした。

Cirque Diana Moreno Bormann

続いて紹介するのはダイアナサーカスです。先ほど紹介したラヴィレットから徒歩30分のところにテントを張るサーカスです。

このサーカスはヌーヴォーシルクという感じではなく、パリスコープにもわざわざ大文字で「Ca C'est du cirque」(これぞサーカス)と書いてありました。

このサーカスの特徴は、トイレが底が見えるぼっとん便所(!)、という他に多量の動物が登場する、ことです。

トラ、シマウマ、水牛、ダチョウ、象、キリン、ラクダ…動物園かい。

しかもそのほとんどが舞台を一周して帰っていくだけなので、まるで動物展示会のようになっていました。

前半、後半にショーが分かれていたのですが、前半だけでお腹一杯になってしまいます。

前半に女性ジャグラーが登場しました。玉乗りしながらリングでジャグります。

5...6...7...8. え～っ。玉乗りしながらの8リングはとも強烈なものがありました。

ただ、玉乗りしながらもくもくと数を増やしていくだけなので、ショーとしての面白さには欠けた気がします。技術はやばいとしか形容できませんが。

その後、クラブを猛スピードで回しはじめます。3回転など、キュルキュル音が聞こえてきそうな感じです。あまりのことに観客はあぜんとしています

4クラブをすべて汚〜く投げて汚〜く投げ返してもとに戻すハーフピルエットに彼女のリカバリー能力の高さがうかがえます。

あっ落とした。やっと観客から拍手が来ます。それだけボロボロやっていたということなんですよ。

この、古きよきタイプのサーカスはニューヴォールシルクと違い、何かが物足りない気がしました。そして、この「何か」こそ、ニューヴォールシルクが人気を集めている理由かもしれません。

CHAPITEAU DU CIRQUE LARUEFORAINE (J'ai pas sommeil)

さて、このニューヴォールシルクなのですが、あまりにニューヴォールすぎて、パリスコープにも「CIRQUE」の欄ではなく「theâtre」(舞台)の欄に載っています。

会場に行く途中、よくあるきらびやかな看板はなく、あるのは明らかにやつつけで作ったとしか思えない「CIRQUE」というスプレーの文字。ある意味ニューヴォールです。開演が25分何も言わず遅れるのもなかなかニューヴォールです。

まず、このショーは目隠しをした女性がロープにつるされるというシーンからはじまります。目隠しを取り、同じく宙吊りにされたチェロを発見し、チェロを弾きはじめます。

ショーは謎に満ちあふれていて、歌を歌いながらのテシューや、3人で逆さ吊りになってのアカペラ。

何かをぼそぼそしゃべりながら狂ったようにトラピーツで同じ技を繰り返したり、とても印象的です。

最後に、「コードフィリユーズ」というコートアヴィスの網がさけるチーズのように何本かにわかれた感じの道具を使う演目は、技が見事で、しかも重苦しいショーの雰囲気とマッチしていて非常に心に残るものがありました。

思うに、ジャグリングを含め、サーカス芸は、表現の手段の一つにしかすぎないのではないのでしょうか。

この作品は、サーカス芸の新たな使い方を示した一つの例だと思いました。

.....

以上、3つのサーカスを取りあげましたが、その他にもパリにはたくさんのサーカスがあります。また、パリ自体も町がとてもきれいでとても良い所です。皆さんも是非一度パリに来て本場のニューヴォールシルクと物価の高さを体験してみてくださいいかがでしょうか？

[山積 隆之介

<rundy_to_cirquedusoleil@docomo.ne.jp>]



お知らせ

西野さん(電通大ばさーじゅ所属)からの情報です。

「フタマタ? サンタマ!」

~ 三多摩ジャグリングフェスティバル開催のお知らせ ~

JJFよりは小さめで、ジャグリングディよりは大きい、そんな地元密着型のジャグリングフェスティバルを、多分日本ではじめて開催します。

三多摩とは、西多摩、北多摩、南多摩で、東京都23区外の多摩地区周辺を指します。

ジャグリングの「三玉: 3balls」とぴったり一致したこの名前にあやかってジャグリング交流しようというイベントです。

名称: 3 Ball Juggling Festival

三多摩ジャグリングフェスティバル

場所: 東京農工大 体育館(東京都小金井市)

日時: 10月18日(土) 9時~21時

内容: ワークショップ、

フリーパフォーマンス、フリーマーケット他

交流を目的にした各種イベント

費用等: 無料

ジャグリングに興味のある方ならどなたでも参加できます。

注意: 上履きが必要です。

駐車場はありません。車での来場はご遠慮ください。

お願い: 交流を目的にしたイベントです。

準備、片付けほか、セルフサービスで、ポラン

ティアベースです。ゴミは各自お持ち帰りください。

連絡先: nishino@fs.se.uec.ac.jp 西野

lchp57@hotmail.com 廣瀬



TV情報

フジテレビ火曜時代劇「夜桜お染め」に鏡味仙三郎、鏡味仙一、鏡味仙三のお三方がレギュラー出演します。お三方はドラマの主な舞台となる寄席「菊川座」の座員として出演し、曲芸や獅子舞を披露するそうです。

平成15年10月14日(火)夜7時に放送スタート!

詳しくは、鏡味仙三郎社中のWebサイトを参照。

<http://1036.net/>



アート見物記

ファイヤー・オブ・アナトリア

(9月25日 NHKホール)

トルコに出張して以来、マイブームは“トルコ”。今年2003年は「日本におけるトルコ年」で、トルコに関連したいろいろなイベントが開催されています。

トルコ・ダンススペクタクルと銘打って総勢約80人にも及ぶダンサーがエネルギッシュなダンスを披露します。リバーダンスを意識したパフォーマンスがあったりして、どこがトルコなんじゃないと思ったりする内容もあるのですが、ベリーダンスには、これぞトルコ!とぐっと身を乗り出したり、メブラーナ旋舞が披露されれば何やら神秘的な感覚に陥り、ああまたトルコに行きたい。

カバレットチッタ(Kabarett CITTA' Vol.3)

(9月13日 CLUB CITTA')

コンセプトがはっきりしている分、3回目ということもあって良くまとまってきたと思うし、何より会場の造りが好きで、テーブル席では特にゆったりと楽しむことができます。

開演前には劇場外では東京チンドン倶楽部による演奏を、恋女房がパフォーマンスを、劇場内ではがーまるちょばがグリーティングをしていたり、いざ公演が始まれば、舞台でのパフォーマンス以外にベリーダンスのお姉様方(総勢十数名)が、恋女房が、そしてMC役の三雲いおりさんが観客席の中で大活躍。これでもかこれでもかと観客を楽しませようと、知恵のあらん限りを尽くしてのサービスの徹底ぶりには脱帽です。

でもどうなんだろう、忙しすぎませんか。私なんかは寄席のゆったりした流れと「間」も好きなんですけれど、あまりに「間」というものを恐れすぎていないでしょうか。少しの「間」、それも時間と空間の「間」を埋めるがごとくの演出としては早くも行き着くところまで行ったような気がします。

個別の演技としては、一番印象に残ったのは水中三姉妹です。前回といい今回もその破天荒な発想には仰天、パワフルな鬼気迫る踊りには魅了されました。

シャングリラ

(9月13日 横浜アリーナ)

4回目ともなるとすっかり余裕、余裕。またまた十二分に楽しませていただきました。素人目にはもう何も変更する必要はないと思われても、それでも手を加えている箇所が幾つか目にとまりました。実際はもっともっと多くの修正が日々なされているのでしょう。妥協という言葉はないのでしょうか、恐れ入ります。

フィナーレでユーミンがアーティスト全員の名前を紹介するシーンではジーンとしてしまいます。超人的な演技を披露してきたアーティストたちが、名前を呼ばれた時に見せる笑顔は普通の人そのものです。その時には何だか超人的なアーティストがごくごく身近に感じられます。

竿灯

(8月29日 秋田大学)

某学会に参加し、そのアトラクションでの「竿灯」を楽しみました。お囃子にあわせるように、竿灯を手のひら、額、肩、腰などに乗せながらバランスをとります。そう言えば平成9年8月放映のNHKの番組「ときめきにっぼん 高く掲げよ光の稲穂 - 秋田・竿灯祭り -」ではお祭りを生中継していました。元々は「ねぶり流し」という悪霊退散と五穀豊穡の豊作祈願が目的の行事だったようで、稲穂に見立てた竿灯を見ていると、お祭りというのは単なるフェスティバルではなく、そこにある風、光、音そしておいを感じ取る文化だということがはっきり分かります。

ART DAIDOGEI

(8月27・26・13・11日 日本テレビ)

汐留に新しくできた日本テレビで、「開局50周年記念 ART DAIDOGEI」と銘打って一流のパフォーマンスが繰り広げられました。観たパフォーマンスは、A & Q、グリチェンコ、ブラザーズ、シルク・パロック、ヤニック、中国雑技段、ローマン、イナ&マキシム。

レニングラード国立舞台サーカス

(8月23日 よこすか芸術劇場)

演技内容から察すると超一流のメンバーとは言い難かったけれど、たくさんの演技がテンポ良く出てきて、テントで観るようなサーカスの楽しさは、夏休みの家族連れには十分に伝わったのではないのでしょうか。

STOMP

(8月22日 東京国際フォーラム)

STOMPが初来日してから10年くらい経つのでしょうか。ようやく観ました。で、観た感想ですが、あまり響くものを感じなかった。確かに面白いのだけれど、ストリートで楽しむには良いのかも知れませんが、1,500人も入るようなホールで聞くには少々無理があるのでは。

金井圭介による

レクチャー & デモンストレーション

(8月21日 恵比寿五画ギャラリー)

金井圭介さんと過ごす3時間。ワンルームの部屋に集まったおよそ20名の観客が金井さんのトークを聞き、ダンスやジャグリングを楽しみました。

約10本のろうそくを半径数メートルの円周上に均等に置き、電気の照明を消した暗闇の中でのクラブジャグリングはとても神秘的でした。金井さんとお話する時間が持てたので聞いてみました。

NHKで放映されたドキュメンタリー「めざせ21世紀のサーカス - 仏・エリート養成校の青春」の中でシルク・イシのジョアンヌさんが悩んでいる金井さんに「自分にとってサーカスが何なのか見えなくてはだめ」とアドバイスしていたのですが、その「何か」は見えてきたのでしょうか。

「ん～、即答は難しいですねえ。」と言いつつ二つのキーワードを教えてくださいました。

“ソロ(一人)”・・・ダンサーでもあるけれどサーカスにこだわりを持つ彼はソロで表現するサーカスを心に描いているようです。

“竹”・・・竹製の独特のクラブを使っていますが、竹のような日本的な物に惹かれているとのこと。

ソロのサーカスと言えば、私はシルク・イシを思い浮かべます。金井さんの抱くイメージは恐らく違うのですが、その具現化したステージを我々に見せてくれるのを楽しみに待っていました。

Mr.マリック新超魔術LIVE TOUR 2003

(8月10日 横浜市民文化会館館内ホール)
やはりしっかりとした演出の上での、確かな技術を持ったマジシャンによるマジックショーは楽しめます。ところで観客全員にあらかじめスプーンが配られ公演の最後に、全員がマリックさん指導の下スプーン曲げに挑戦するのですが、な、なんと、私曲げちゃったんです、スプーンを！初体験。会場を見渡しても一割程度の人しか出来なかったようですが、感動ものでした。

ビーシャ・ビーシャ

(8月9日 赤坂ACTシアター)

台風が大接近していて大雨の日だったので、どうせ公演を観てもずぶぬれになるので気にせず出かけられました。興行的にうまくいったとすればこれはアイデアの勝利ですね。

なんせそんなに広くない空間に数百人がすし詰めの朝の満員電車状態で、立ちっぱなし。口を半開きにして天井や壁のパフォーマーを見上げていれば、上からは滝のように水が降り注いでいて当然床はべちゃべちゃ・・・それでも観客は大喜びで、打ち鳴らされる太鼓のリズムにあわせて飛び跳ねます。またパフォーマーは観客の中に入ってきて、叫んだり抱きついたりやりたい放題。中年のおじさんにはちょっと場違いかと思いつつ楽しまにゃ損・損。

blast! プラス・エンターテイメント

(7月26日 Bunkamura オーチャードホール)

本来野外スタジアムやグラウンドで行われるドラム・コーをステージ用にショーアップしたユニーク作品で、具体的には打楽器、管楽器、そしてヴィジュアル・パフォーマンスの3つのユニットからくり出される音楽とダンスによるエネルギー溢れるショーです。音楽のダイナミックでスリリングなことはもちろん、カラーガードと呼ばれる、フラッグやライフル、サーベルを模擬した道具をアクロバティックな動きと共に自由自在に操る様はジャグラーもびっくりです。

ぐるぐるデジャブ ～ぐるぐるシルク Vol.4～

(7月4日 中野ザ・ポケット)

青色を基調とした舞台にドラマ性をもたせた演出で、3人が競い合うように、しかしながらお互いに協調しつつ演技を進めていきます。

JugPal20号でのインタビューでお話しいただいたのですが、この公演のためにシフォン(天井からぶら下がった布を使ってのサーカスアクト)には力を入れずいふんと練習されたようで、3人共に身体がぐっと引き締まっていました。

編集後記

[安部 保範 <chansuke@chansuke.net>]

パソコンを買い換え、ADSLも通信速度を早くして、宅内で無線LANを導入したり、我が家のブロードバンド環境も整いつつあります。ネット上で“juggling”という単語で映像検索すると、何件かヒットして世界のジャグリングのニュース映像等を楽しむことができるのですが、いやはや十年以上前のネットの世界から比べるとまさに隔世の感があります。

残念なお知らせです。好評をいただいておりますモグタンによる「東洋医学から見るジャグリングのすすめ」は、ご本人のお仕事の都合で先号をもって休載いたしました。また本誌でお目にかかることを楽しみにしております。(モグタン、長い間ありがとうございました)

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出して、単なる趣味として発行していて、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人には一切関係しているものではありません。

ジャグパルはWeb上でも見られますので、紙での郵送が不必要な方はご連絡ください。

WebサイトJugPal: <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

編集発行人: 安部保範

住所: 横浜市栄区公田町424-9 (〒247-0014)

見世物広場: <http://www.chansuke.net>

E-mail: chansuke@chansuke.net